

知財実務×生成AI：2027年に向けた自律化への進化ロードマップ

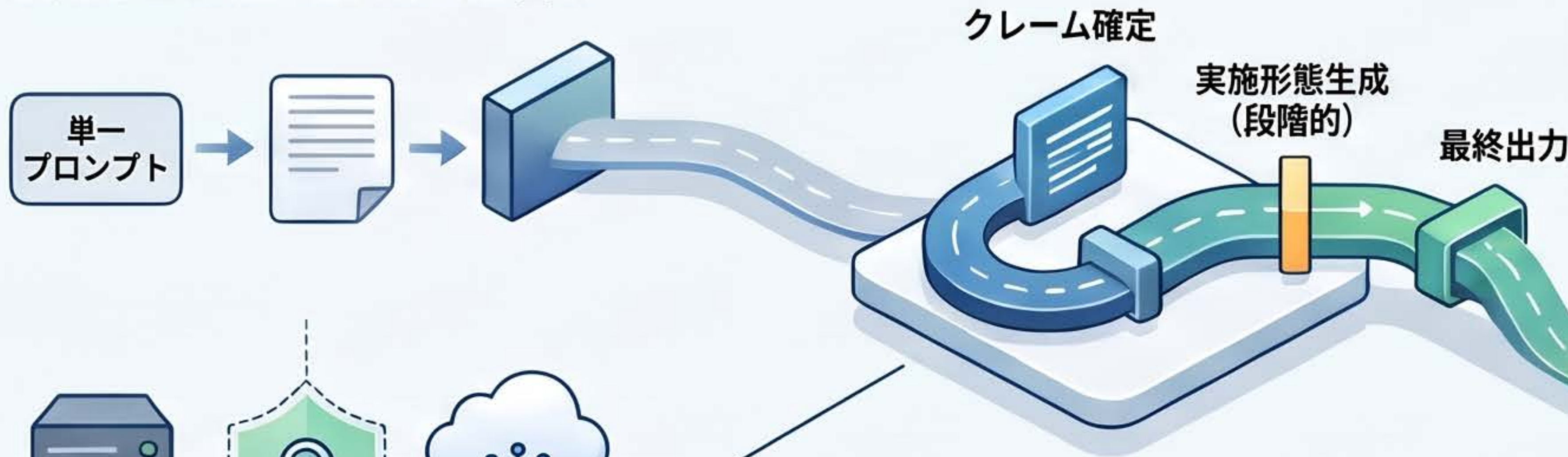
2025年-2026年：構造化と実務への定着

2025年の「一括生成の幻想」を脱し、2026年には「人間が介在する多段階パイプライン」へ。2027年にはAIが自律的に推論・修正を行う「マルチエージェント型」への移行が予測され、専門職の価値は「鉛筆」から「戦略的結核」へ。

2027年：自律化と戦略的価値の転換

「一括生成」から「多段階パイプライン」へ

誤謬を防ぐため、クレーム確定後に実施形態を段階的に生成する手法が標準化。



機密性に応じたインフラの二極化
未公開發明は完全オフライン、公開データ分析はクラウドと使い分けが明確化。



人間の蓄想を蔑視



AI出力への代理人の全責任を明文化

代理人責任と法理の再定義

USPTOは人間の着想を重視し、EPOはAI出力への代理人の全責任を明文化。

2025年の実務環境 (試行期)

生成方式

単一プロンプトによる一括生成

品質検証

人間による全文目視レビュー

ガバナンス

効率化の議論が中心

2026年の実務環境 (実期)

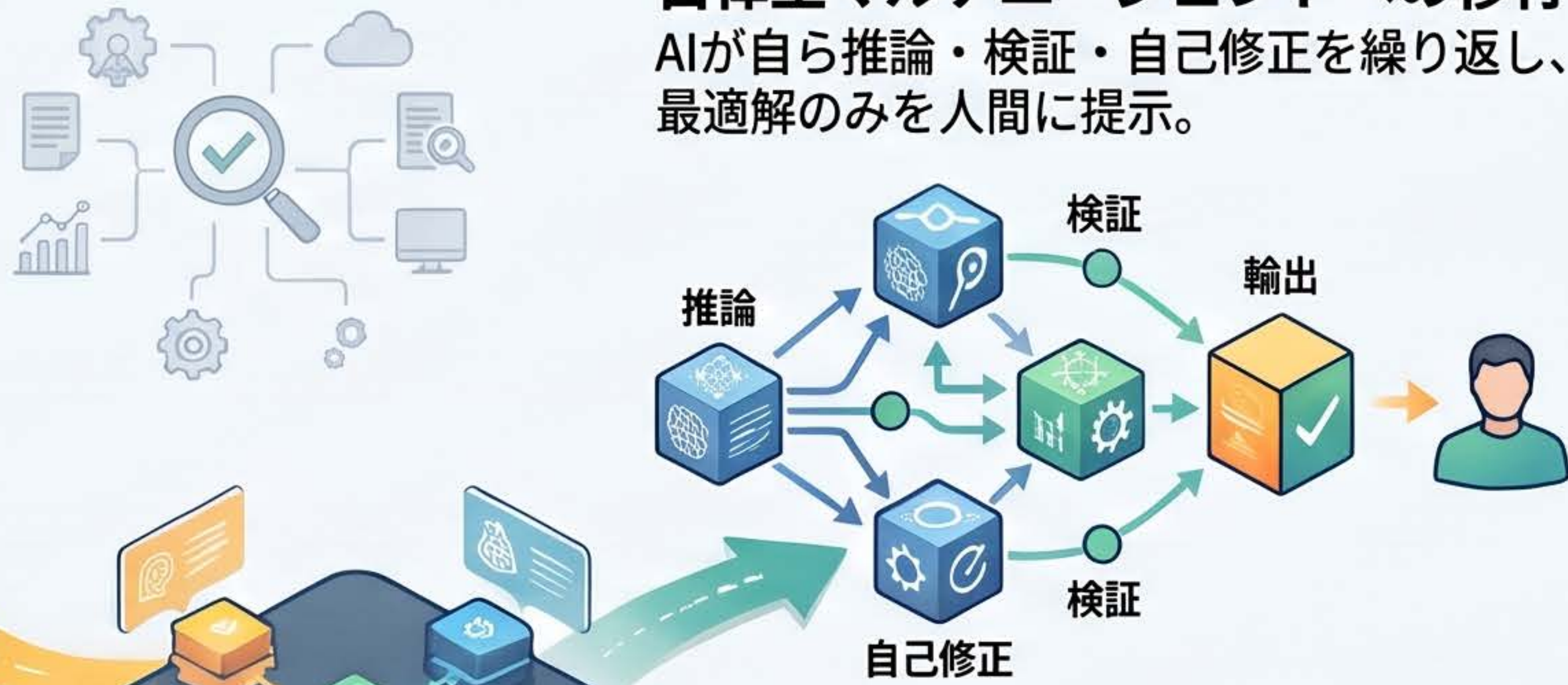
思考プロセスの構造化・段階的生成

50以上の基準に基づく自動監査

弁理士法遵守と法的責任の明文化

自律型マルチエージェントへの移行

AIが自ら推論・検証・自己修正を繰り返し、最適解のみを人間に提示。



出願人側AI

特許庁AI審査

アルゴリズム同士が対峙する審査
特許庁のAI検索を、出願人側のAIがシミュレートして先回りする時代へ。

専門職価値は「構想力」へシフト
タイムチャージ制が崩壊し、害業独占の境界線を確定する戦略性が報酬の源泉に。